

世界遺産『ベルリンの博物館島』から バウハウス、ユーゲント・シュティールまで ～ドイツ近現代芸術の変遷を辿る～



シュプレー川沿いに立つボーデ博物館

私が初めてベルリンを訪れたのは、1991年の夏のこと。「ベルリンの壁」が崩壊してから、まだ2年も経っていない時でした。既に壁は取り壊され、ところどころにその残骸があるといった感じでした。当時、フランクフルトやミュンヘンなど旧西ドイツの都市は近代化が進んでいましたが、ベルリンは旧東ドイツの影響が色濃く残り、近代化というには程遠いものでした。ベルリンの壁が、どれくらいの長さだったのか、ご存知でしょうか。西ベルリンを取り囲むように建てられたので、なんと150 km以上もあったのです。

ドイツの本当の意味での“戦後”は、ベルリンの壁が崩壊した1989年から始まった、といっても過言ではないでしょうか。私は壁が崩壊する前、1989年の春に旧ソ連のモスクワを訪れました。ゴルバチョフ政権下でペレストロイカの真っ只中、旧東ベルリンの町並みはフランクフルトやミュンヘンよりもモスクワに近い感じで、ドイツらしさは全くなく、お店を覗いても品薄で、時代遅れの商品ばかり陳列されていたのを覚えています。また、街中に広告やネオンなども無く、まさに「共産圏」といった印象です。若者の集団による観光客への襲撃など物騒な一面もあり、一人歩きもままならない状況でした。それに対して、旧西ベルリンの町並みは少し華やかさがあって、資本主義経済と社会主義経済が混在している感じでした。それから30年以上が経過し、今やベルリンはドイツ有数の先進都市に変貌し、壁の崩壊当時の面影は殆どありません。安心して旅行ができる街に生まれ変わりました。

このベルリンで、見逃してはならない世界遺産があります。それはシュプレー川の中州にある「博物館島（ムゼウムスインゼル）」で、1999年に世界遺産に登録されました。

博物館島は、1824年から約100年かけて、美術館と4つの博物館が建設されました。最初に建設が始まったのが「旧博物館」で、その後、博物館島は「芸術と科学の聖域」と定められ、国家の威信をかけた事業として建設が進みました。最後に完成したのが、一番人気がある「ペルガモン博物館」で、本物の巨大な神殿や門が展示され、訪問者を圧倒します。

5つの美術館・博物館群の展示品は、諸外国のものが中心です。諸外国のものを蒐集^{しゅうしゅう}できるといふことは、それだけ国力があったことを示します。プロイセンを中心にドイツ統一の動きが活発化し始めたのが1830年代、1871年にはドイツ帝国誕生、国力が増強し、その後は第一次世界大戦へと向かいます。ちょうど美術館・博物館群の建設時期と重なります。また、完成後の博物館島は、第2次世界大戦で大きな被害を受けました。博物館島はドイツ芸術を見せるだけでなく、それ以上に、ドイツの威信を諸外国に示すためのものだったので



ペルガモン博物館と「ゼウスの大祭壇」



旧博物館

シュプレー川沿いに威風堂々と佇む「ボーデ博物館」、ギリシャのアクロポリス神殿のような「旧博物館」と、博物館島のスケールは壮大です。ドイツ絵画に絞ってみると、「旧国立美術館」の展示作品は、日本では馴染みの薄い画家のものが多く、かえって新鮮で良いかもしれません。



旧国立美術館



新博物館と「王妃ネフェルティティの胸像」



『ベルリンの博物館島』は、5つの美術館・博物館群がまとまって世界遺産に登録された珍しい例です。詳細は下記の表にしましたのでご覧ください。

『ベルリンの博物館島』5つの美術館・博物館群

名称及び完成年	主な収蔵品・展示品
旧博物館（1830年）* Altes Museum	古代ギリシャ・ローマの古代美術作品など。
新博物館（1859年）Neues Museum	古代エジプトの工芸品、ドイツ先史時代の資料など。 王妃ネフェルティティの胸像
旧国立美術館（1876年）Alte Nationalgalerie	古典絵画、ドイツ絵画、フランス印象派絵画など。
ボーデ博物館（1904年）Bode-Museum	彫刻、ビザンチン文化の美術品、コインやメダルなど。
ペルガモン博物館（1930年）Pergamonmuseum	古代ギリシャ・ローマ、アジアの建築、美術品など。 ゼウスの大祭壇、イシュタル門、ミトレスの市場門

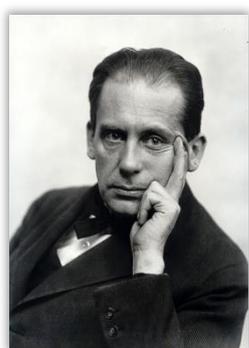
* 旧 (Altes) は、かつて博物館であったという意味ではなく、「古い時代」の意味。

ベルリンで西洋絵画をご覧になりたい場合は、文化フォーラム内の「絵画館」をお勧めします。フェルメール作『真珠の首飾りの女』やブリューゲル作『ネーデルラントのことわざ』をはじめ、ラファエロ、レンブラント、ルーベンスなど、名立たる巨匠の作品を鑑賞できます。「ベルリン国立美術館」という名称を聞いたことがあるかもしれませんが、これは、博物館島も含めたベルリン全体の複数の国立美術館・博物館群の総称（SMB, Die Staatlichen Museen zu Berlin）です。SMBの各美術館・博物館は、それぞれ収蔵品の範囲が定められています。ベルリンの街はとても広く、立地も考えると、鑑賞したいものに目星を付けて周るのが良いと思います。3日間有効の「ミュージアムパス（Museumspass Berlin 3-Tage-Karte）」や1日有効の「博物館島5館のパス（1 Ticket mit Eintritt zu 5 Museen）」などもお勧めです。

ドイツの美術館・博物館の特徴としては、ミュンヘンのアルテ・ピナコテーク、ノイエ・ピナコテーク、モダン・ピナコテークの美術館群、フランクフルトのシュテーデル美術館やメイン川沿いの博物館群など、大きな美術館や博物館がひとつのエリアに集中していることが挙げられます。ドイツ古典絵画の中心は、アルテ・ピナコテークなどを擁するミュンヘンです。それに対して、ドイツ近現代絵画の中心は、ベルリンです。

ドイツ美術は、アルブレヒト・デューラー（1471年～1528年）やルーカス・クラナハ（1472年～1553年）などが活躍したドイツ・ルネサンス期以降、イタリア美術やフランス美術の後塵を拝し、目立たない存在でしたが、再び脚光を浴びるのは、約400年を経た19世紀後半からです。ドイツ国内、特にベルリンでは、様々な「芸術運動」、「造形活動」が開花しました。

その象徴とも言えるのが、「バウハウス」です。バウハウスは「モダニズム建築」に大きな影響を与えた総合造形学校で、ドイツ語で「建築の家」という意味です。1919年にヴァイマルで設立され、1925年にデッサウに移転、1932年にベルリンに再度移転しましたが、当時の政治の影響下、翌年に廃校となりました。14年間という短い歴史ではありますが、その後の建築や造形美術に多大な影響を与えました。バウハウスは、1996年に『ヴァイマルとデッサウのバウハウス関連遺産』として世界遺産に登録されました。



ヴァルター・グロピウス



バウハウスとファース靴型工場



初代校長のヴァルター・グロピウス（1883年～1969年）は、建築家として、世界遺産『ベルリンのモダニズム公共住宅』や、同じくドイツの世界遺産『アールフェルトのファーグス靴型工場』などの設計に携わり、3代目の校長、建築家のミース・ファン・デル・ローエ（1886年～1969年）は、チェコの世界遺産『ブルノのトゥーゲントハート邸』や「ベルリン新国立美術館」を設計しました。



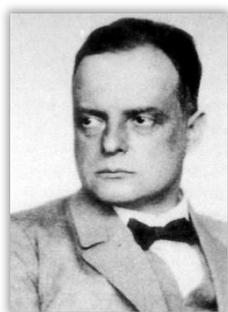
トゥーゲントハート邸



ミース・ファン・デル・ローエ

バウハウスの教師陣には、世界的に有名な画家もいます。スイス出身のパウル・クレー（1879年～1940年）とロシア出身のヴァシリー・カンディンスキー（1866年～1944年）です。ふたりは、建築そのものではなく、デザインや色彩や表現方法などを教える絵画教師として、^{きょうべん}教鞭をとりました。カンディンスキーは、ミュンヘン出身のフランツ・マルク（1880年～1916年）と共に「青騎士」という前衛芸術の絵画運動を興しました。「青騎士」は20世紀初頭にベルリンを中心に開花した「ドイツ表現主義」の流れを組むもので、つまり、青騎士もドイツ表現主義も「自由な発想の抽象表現」という意味合いになります。

パウル・クレー



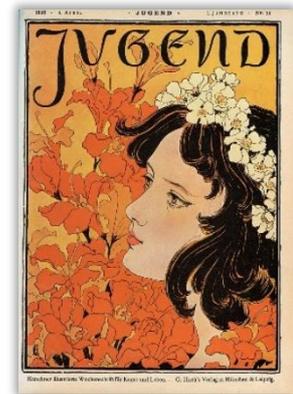
フランツ・マルクと『Blaues Pferd I』



ヴァシリー・カンディンスキー

バウハウスの作品は「四角、三角、直線などの組み合わせ」が特徴的なのですが、同時代には、それと対局するような「曲線美のデザイン」も注目されました。それは、ドイツのアール・ヌーヴォーと呼ばれる「ユーゲント・シュティール」という芸術運動です。ミュンヘンで発行された雑誌『ユーゲント』の若々しく柔らかい印象の表紙が評判となり、^{またた}瞬く間にドイツ国内に広がりました。ベルリンにも波及し、その後のベルリン分離派（世紀末の芸術運動）の誕生に繋がることとなります。分離派というと、ウィーン分離派が良く知られていますが、いずれも流れは同じ世紀末の芸術運動を指します。

1899年にフランクフルトの郊外、ダルムシュタットの「マチルダの丘」に芸術家コロニーが誕生し、ユーゲント・シュティールの前衛芸術家たちの活動拠点となりました。バウハウス設立よりも、こちらの方が約20年も早いものでした。そして、この「ダルムシュタットのマチルダの丘」がなんと、一昨年の2021年に世界遺産に登録されたのです。マチルダの丘にある芸術家や建築家のアトリエ群が、ドイツの近現代芸術が、世界遺産として認められたのです。このユーゲント・シュティールの建築もバウハウス同様、海外にも^{でんぱん}伝搬し、ドイツの租借地であった中国の^{チンタオ}青島にはユーゲント・シュティール建築の建物が残っています。ラトビアの首都、世界遺産『リガの歴史地区』にもユーゲント・シュティール様式の建築物が立ち並んでいます。このように、バウハウスやユーゲント・シュティールの芸術運動は、世界遺産としての価値も生み出したのです。



雑誌『ユーゲント・シュティール』



ダルムシュタットのマチルダの丘

19世紀末から20世紀初頭にかけて、ドイツでは多彩な芸術運動が起きました。絵画ではその後の抽象絵画の先駆けとなったドイツ表現主義や青騎士、建築ではバウハウス、デザインではユーゲント・シュティールなど、時代の大きなうねりの中で、様々な芸術運動が誕生しました。ベルリンを中心とした広がりを見せましたが、1930年代から第二次世界大戦の時期は、退廃芸術として弾圧を受けた苦難の歴史もあります。戦後は、弾圧から解放され、バウハウスの理念や自由な絵画表現などが世界へ広がっていきます。ベルリンでは、1989年の壁の崩壊の後、1998年から「ベルリン・ビエンナーレ」という現代アートの祭典が開催されています。昨年2022年は、12回目の開催を迎えることができました。ベルリンは古いものを大切にしながら、現代アートの街へと変貌しつつあります。

今回は、ドイツの近現代芸術の変遷と世界遺産との関わりについて、書かせていただきました。「ドイツ芸術」も世界遺産と深く関わっていることをお分かりいただけるとありがたいです。

話をベルリンの街に戻しますと、ベルリンの壁は現在、数カ所しか残っていません。わりと知られているのがイーストサイド・ギャラリーで、距離にして約1.3kmの壁が残っています。この壁に描くことの是非や、作品として扱って良いものかどうかは別として、東西ドイツへの統一の想いが込められていると感じます。「ベルリンの壁記録センター」や「壁博物館」なども見学すると、当時の状況を把握できます。ベルリンの壁は、崩壊後は不要なものとして、ほんの数年で殆ど片付けられたそうですが、多く残っていれば、「負の遺産」として世界遺産に登録されたとしても不思議ではないでしょう。また、ベルリン市内では、壁関

連の各箇所を「観光スポット」として巡るバスツアーも出ています。しかし、ベルリンの壁が崩壊して約33年という歳月は、観光という視点で捉えるには、まだ早いのではないかと私は感じています。長い年月が経ち、過去の歴史上の出来事になれば、観光という視点で捉えても良いでしょうが、近年のヨーロッパの情勢を考えれば、楽観視できないような気がします。ベルリンは今や平和な芸術都市ですが、大きな戦災を被った都市でもあります。その教訓を活かして、これからも平和な芸術都市として、あり続けてほしいと思っています。



1989年当時のベルリンの壁（西側）



現在のベルリンの壁（旧東側）

沼田政弘